学探 GAKUTAN 進学適性検査 活用校インタビュー

文理選択の際の“客観的資料”として、“GAKUTAN”の判定結果を活用。生徒の新たな一面も発見できた。

群馬県立 太田女子高等学校

第一学年 主任
加藤 哲郎先生

群馬県立太田女子高等学校は、創立100年以上の歴史を持つ伝統ある女子校です。太田市を代表する進学校であり、例年、現役で国公立大学へ100名以上の合格者を輩出するなど、難関四年制大学への進学率が高く、また、看護・医療系への進学者が多い点も進路の特色となっています。「自律博愛」の校訓のもと、学業だけでなく、陸上部や理科研究部など、全国レベルの優秀な実績をあげている部活動も多く、世界で活躍できる総合的な人間力を備えた人材の育成に力を注がれています。

—「進学適性検査 GAKUTAN」（以下GAKUTAN）は、何年生を対象に、いつ頃実施されましたか？　また、ご活用の目的は？

加藤先生　高校1年生を対象に、入学後ある程度学校に慣れた5月下旬の中間考査の期間に実施しました。活用の目的は、自己理解の深化と適性把握です。判定結果は、2年次から始まる文理分けに向け、選択の一助として参考にします。また、「GAKUTAN」は、能力検査も含まれているため、より多面的に進学適性が測れる点も、採択のポイントとなりました。紙に出力される判定結果資料は、管理しやすいというメリットもあります。さらに、付録として配付される冊子『GAKUTANブック』は、学問だけでなく職業に関する情報も網羅されており、社会人になった時の進路を見据えた「上級学校探し」に役立てることができます。

—判定結果は、いつ頃、どのようにフィードバックされましたか？

加藤先生　判定結果資料は、届いてからすぐに配付するのではなく、6月下旬の期末考査期間中に行われる、第1回目の文理分け説明会の中で返却しました。6月には、各方面で活躍されている社会人から人生経験や職業の話を聞く「社会人講演会」の開催もあり、進路意識が芽生え始めたタイミングでの返却で、生徒に主体的に進路選択を考えさせる良い機会となりました。

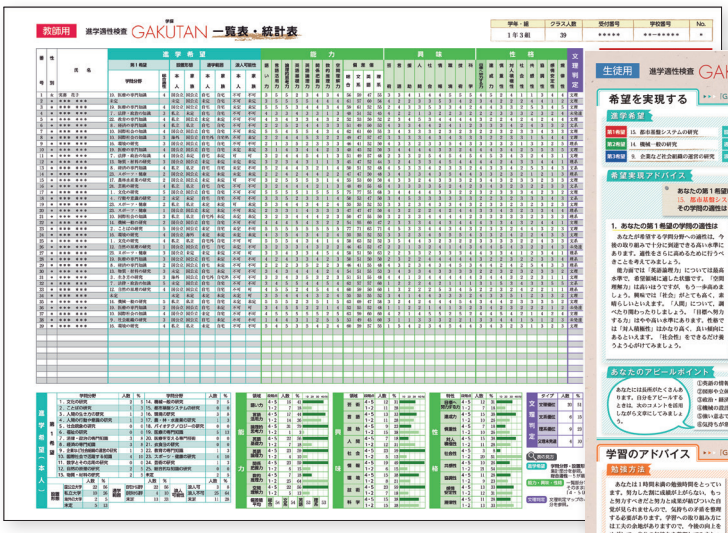
—判定結果を返却した際の、生徒の反応はいかがでしたか？

加藤先生　反応は様々でした。判定結果に納得する生徒もいれば、意外な適性が出て、「えーっ！」と驚く生徒もいました。生徒は仲間と見せ合ったりして盛り上がっていましたが、生徒も担任も、新たな発見があったようでした。「GAKUTAN」活用の意義として、客観的な資料で自分を知るという点もありますが、新鮮な目で自分を見つめなおすことができたのではないかと感じました。

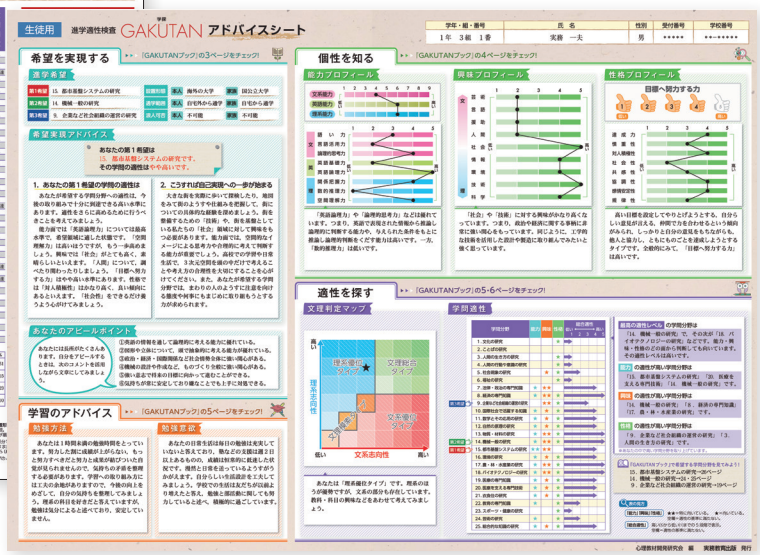
—他にも判定結果を活用した場面があればお教えください。

加藤先生　1年生は、続いて11月に文理分けの本調査

▼アドバイスシート（生徒用）



▲一覧表・統計表（教師用）



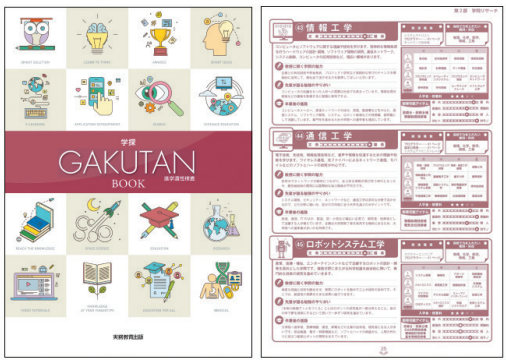
を行います。また、11月には、「総合的な探求の時間」で、県外の大学･企業訪問を開催し、大学調べや職業観･勤労観の育成につなげています。そして、12月に三者面談を行い、卒業後の進路を見据えた文理選択と学習方針を確定する流れとなります。

三者面談の際に、「GAKUTAN」の判定結果を、保護者とも共有します。本校の場合、文理選択後のコース変更はできませんので、その後のミスマッチを防ぐためにも、「GAKUTAN」の判定結果を参考にします。ここで、進路に対する新たな気づきが見つかり、文理の希望を変えた生徒もいました。

また、『GAKUTANブック』は、文理を考える際の情報探求用として活用しましたが、生徒だけでなく、担任、保護者にとっても役に立つ資料となりました。

―その他に御校の特色ある指導についてお聞かせください

加藤先生　本校では、例年、看護･医療系への進学志望者が多いのが特色ですが、インターンシップとして、上級学年を中心に、地元の病院で医師･看護師体験を行っています。感染症対策には十分に配慮していただきながら、生徒は実体験を通じて、職業理解を深めるとともに、「医師･看護師のやりがい」を感じ、今後の進路実現や学校生活において良い動機付けになると考えます。



▲『GAKUTANブック』（生徒用）

また、1･2年生を対象に「アメリカ研修」と称した語学研修を行っています。コロナ前の2016年から4年間実施し、コロナ蔓延中は代替行事を行っていましたが、2023年に再開しました。7月初旬より9日間、アメリカの東海岸のボストンに設置されたタフツ大学で、同じ目的で集まってきた他国の生徒とともに合宿しながら過ごします。すべてが英語で進む授業の中、生徒は各国の仲間とコミュニケーションをとりながら、一歩ずつ語学力を身に付けていきます。生徒たちは、自宅を離れて研修をする中で、身の回りのことはすべて自分で行わなければならず、大変なこともありますが、色々とできるようになり、少しずつ人間的な面での成長も重ねて帰国してきます。

（令和5年8月取材／文責･実務教育出版　三浦俊哉）